

小田原市文化振興ビジョン策定検討委員会 第1回会議概要

1 日 時：平成23年8月10日（水） 15：30～17：30

2 場 所：小田原市役所 大会議室（7階）

3 出席者

(1) 委員（11名）

石塚委員長、間瀬副委員長、鬼木委員、桧森委員、杉崎委員、露木委員、
平井委員、岩城委員、大森委員、神馬委員、山口委員

(2) 行政（8名）

加藤市長、諸星文化部長、奥津文化部副部長、座間文化政策課長、
古矢文化芸術担当課長、杉本文化政策係長、福井主査、瀬戸主任

4 傍聴者：3名

5 概 要

(1) 会議の公開について

小田原市情報公開条例第24条に基づき、公開することとした。

(2) 委員長及び副委員長の選出について

委員の互選により、委員長に石塚氏、副委員に間瀬氏を選出した。

(3) 市長あいさつ

【加藤市長】

- ・文化振興ビジョン策定の発端となったのは城下町ホール整備計画の中止であり、この時は、市民が新しいホールに何を期待するのか、また、行政がホールにどのような役割を課すのかといった議論が十分に煮詰まっていなかった。
- ・ホールの整備に当たっては、ホールで何を育てるのか、何を創るのかということを市民・行政双方がきちんと考えていかななくてはならず、このことは市民ホール基本構想の検討段階でも指摘を受けてきた。
- ・他都市の文化行政予算が数千万あるいは億単位であるところ、小田原市は数百万である。
- ・現在、市民会館で行われているのは典型的な貸館の興行であり、市民は専ら「客として観る」立場であったことに市民自身が気付いてきており、また、行政でもその

ような仕掛けしかしてこなかった。

- ・文化は、ホールの中だけでなく市民の暮らしや経済、まちのあり方からにじみ出てくる広範囲なものである。市民として、また小田原市として、文化をどう育てていくかというミッションが課せられている。
- ・地方自治体の財政状況は厳しく、東日本大震災の発生に伴う新しい課題もある中で、文化は緊急性が低いものと位置付けられてきたが、むしろこういう時代の中で、市民が活力を見出し、問題を一緒に解決していこうという風土生み、共有していくことのできるものが、芸術文化の表現活動、地域に根ざした伝統芸能、ものづくりであり、これらについて広く議論していくべきと考えている。
- ・今回、限られた時間の中で膨大な議論をしていただくこととなるが、小田原市は豊富な資源や担い手を有しており、他にはできないことができると考えている。

(4) 議事

【石塚委員長】

- ・抽象的な問題提起であるが、具体的に議論し、まとめていくために、議論を進めていく上での切り口について桧森委員から意見を伺いたい。

【桧森委員】

- ・「文化とは何か」という問題に対し、最も簡潔な解答は、アメリカの文化人類学者クラックホーンによる「人々が頭の中に共通で持つ青写真」である。「青写真」は「設計図」と言い換えることもできる。
- ・私は浜松市の文化振興ビジョン策定に携わってきた。浜松市は産業都市であり、文化振興ビジョンは、「文化が創造性を育み、その創造性が経済を活性化する」「付加価値の高いものは創造性豊かな人がつくり、そのような人は豊かな文化がなければ集まってこない」という考え方に基づいている。
- ・一方で、文化によって育まれる大切なものは「絆」であると考えている。例えば災害時に支え合って生きる人達の背景には、一種の文化がある。
- ・小田原市の文化振興ビジョンを考えた場合、小田原市で人々が共有しているものは何か、将来的に小田原市がどういうまちになっていきたいのかが、文化について考えていく上で大切。
- ・文化振興ビジョンは、絵に描いた餅ではない。浜松市のものは、一見抽象的ではあるが、文化に関する施策や事業、予算の根拠となっている。ビジョン実現のために何をしたら良いかという観点から毎年の事業が決まっており、首尾一貫したものとなっている。
- ・静岡文化芸術大学の授業でも、学生に対して漠然と文化施策を考えさせるよりも、ビジョン実現のために何をするかを考えさせたほうが、様々なアイデアが出てきた。

- ・ただし、自分がやりたいことや既存の事業をビジョンに無理やり結びつけるのは役人の発想であり、考え方としては逆である。
- ・（市民ホール基本計画についての質問に対して）基本計画は、ハードとソフト双方に関する計画である。基本計画策定に当たっては、市民検討委員会でホールを何に使うのか、ホールで何をするのかを考え、それをハード的にどう実現するかを専門委員会が検討するという流れになっている。何のためのホールかということ、市民が議論するところからスタートしている。

【石塚委員長】

- ・本日のテーマに対する考えについて、着席順に伺いたい。

【平井委員】

- ・小田原の人が共通して持つ設計図とは、一言で言うと「なりわい文化」だと思っている。小田原には豊かな自然があり、交通の要所でもあり、その風土と歴史を背負って発展した経済活動や生活がある。
- ・以前、小田原のかつお節店は、浜から通りまで細長くつながった造りになっており、浜の側からかつおを捌く場所、さらにかつお節に加工していく場所、そして通りに面してかつお節を販売する場所というように並んでおり、生業の過程が一目で分かるようになっていた。また、店頭にはいろいろな種類の削り節があって、購入時にその使い方を教えてくれたものであり、削り節のパックを購入するだけでは得られない生活の彩りがあった。そのようなかつてのつながりを取り戻すことが、桧森委員のおっしゃる「絆」につながると思う。
- ・高度成長により豊かな社会が実現されたが、一方で、将来への負債を残したと感じている。これ以上社会環境に負荷をかけるような文化振興は行うべきではない。
- ・ビジョンの進行管理として、策定後も本委員会のような組織を残し、毎年の実現度のチェックや新しい動きに即したバージョンアップを図っていくと良い。

【岩城委員】

- ・私はこれまでの活動において主婦の立場を徹底し、子育てにおける情操教育を重視してきた。コンサートや美術館に行っても、帰ってきて無機質な生活に戻ってしまうのでは意味がない。自宅に小さな絵や花を飾るだけでも、家族や来客とのコミュニケーションのきっかけとなり、生活にゆとりが生まれる。文化活動をしていない主婦であっても、文化芸術を広げていくことができると思うが、このような地味なものはデータに現れず、歯がゆい思いをしている。
- ・自分からは出かけていけない人に、どのように文化に触れてもらうかが課題と認識している。そのような人を連れ出すと、感動してCDを買ったり花を活けたりするようになることもある。
- ・完璧なものは望まない。手をかける必要はない。日常の中で文化芸術に触れる機会

がもっとあれば、それだけで満足できるのではないか。一人でも多くの市民の文化の質を上げることができればと思う。

【大森委員】

- ・小田原の観光コンテンツという視点から考えると、歴史と環境が最大の武器である。小田原城のピークは戦国時代と考えるが、それを象徴する総構や一夜城もあり、また、森・川・海が揃っているのは小田原ならではの。
- ・環境再生に関して（NPO 法人）グラウンドワーク三島の渡辺さんがおっしゃっていたのは、「人の気持ちを変えれば動き出す」ということで、文化振興においてもこれがキーポイントとなると思っている。
- ・ビジョンを絵に描いた餅にしないためには、心が元気にならないといけない。人の意識が変わらないとどうにもならない。感動があってこそその芸術であり、ちょっとした感動でも大きな変化につながる可能性があると思う。まずは人の心を動かすことから始めたい。

【神馬委員】

- ・横浜出身で、15 年ほど前に小田原に来たが、小田原には文化面で良い素材がたくさんある。
- ・文化は生き生きと暮らすのに必要なものの一部分である。日常から切り離さず、生活の一部と考えたい。
- ・文化というと、小田原の人は東京や横浜に出かけて行ってしまふ。よそで済ませれば良いのではなく、逆に小田原に呼ぶためのシンボリックなものがあると良い。
- ・市域は広いので、小田原市民のビジョンという意識を持てるような、広く効力の及ぶものとしたい。

【山口委員】

- ・まずは「このまちをどのようにしていきたいのか」を考えることが大事と感じた。最終的には、市民が「ずっと小田原で暮らしたい」、市外の人が「小田原に行ってみよう」と思うことが目標なのではないか。そして、それをどうやって実現していくかを考えたときに、小田原の人が共有するものとして、小田原固有の歴史・風土を基盤に作業をしていくことが考えられる。
- ・「小田原評定」という言葉には、プラス・マイナス両方の意味があるが、個人的には「最後まで話が決まらない」というマイナスイメージが強い。定着してしまったマイナスイメージをプラスに変えることを活力につなげるという視点も必要。
- ・小田原は伝統的なまちなので、古いものから近代のものまで幅広くある。例えば小田原城と清閑亭との時間差は 300~400 年あるが、どちらかということではなく、資産として一緒に活かしていきたい。

【露木委員】

- ・生まれも育ちも小田原だが、4年間京都に住んでいた。京都は、資源自体は少ないが、人の技術によって発展してきたまちと感じた。伝統工芸がある一方で、若い人が新しい活動をしているのが良い。
- ・小田原も、城下町・お菓子・かまぼこといった京都に負けない文化があると思うが、あまり認識されていない。小田原・箱根の木工には1,200年の歴史があり、ブナの木の利用としてお碗から始まったものが、漆器や寄木細工へと活かされていった。小田原でも京都と同様に、人の力でいろいろなものが生まれてきたと言える。
- ・他にはない、小田原独自の特色あるまちづくりをしていきたい。

【杉崎委員】

- ・京都には年に5~6回行くが、京都ブランドとして、作品を使って新しい商品をつくっていく仕組みがあり参考になる。何かを加工していく過程は、小田原に似ていると認識している。
- ・ビジョン策定に当たり気になっていることは、文化が生涯教育として扱われている点と、「絆」という文字が中国では良い意味を持たない点。
- ・古いものと新しいものが混在できるような仕組みづくりをしたい。現在、小田原の店舗にアートを展示する活動をしており、これは今後も続けていきたい。

【鬼木委員】

- ・文化振興ビジョンとは、小田原というまちのあり方を考えていくこと。「どのような都市になりたいか」ということは、「どのような市民になりたいか」ということとイコールであり、言い換えれば、小田原市民の自治について考えることが、文化振興ビジョンの策定なのではないか。
- ・ビジョンにはストーリーが必要。浜松の事例の中で「創造性が経済の発展につながる」という話を伺ったが、小田原市には別のストーリーがあるかもしれない。生活文化やものづくりといった小田原ならではの要素をビジョンの中でストーリーとして提示する。多様な価値観があるので、いろいろなストーリーが共存し、市民が皆で共有できるものが良い。抽象的な表現では、なかなか市民に伝わらない。
- ・「小田原評定」は必ずしも悪いものではない。議論し続ける場であって良い。文化のあり方が変わっていくにつれて、ビジョン自体も成長していくと良い。

【間瀬副委員長】

- ・委員の皆さんに共通して感じたのは、まちを愛しているということ。長い歴史の中で文化ができてきたと思うが、生活文化や伝統文化など幅が広いので、ビジョンにどう盛り込むかがこれからの課題となる。
- ・逗子市で文化振興条例を制定したのは、行政に縛りをつけるため。条例に定められていれば行政はそれに沿って動いていくし、その枠から大幅にずれていくこともない。逗子文化プラザホールを整備し、将来的に地域の文化を振興していくに当たり、

地域の方々が続けてきた文化活動にブレーキをかけない仕組みづくりをした。

- ・逗子市にはさらに文化振興基本計画があり、より具体的に5年間で何をしていくかが定められている。これは市民レベルで考えていかななくてはならないもの。
- ・一般的に、文化活動はジャンルごとに縦割りになっていてしまっており、そこに横串を入れるべき。小田原では無尽蔵プロジェクトがその役割を担っていると感じる。文化振興の議論には、市民同士の横のつながりが必要。
- ・先程、素材があることで木工が始まり、技術が蓄積されて作品ができていくという話があったが、文化も同様で、まちの人という素材をどう活かしていくかがビジョンのベースとなると思う。
- ・文化振興ビジョンは、まちづくり条例に近い形になるのではないかと感じており、それをどのように芸術文化につなげていくか、また、ビジョンのミッションの一つとして新ホールの将来的な方向付けがあるのなら、どのようにそこに結び付けていくかがこれからの課題となる。

【石塚委員長】

- ・着席順では桧森委員となるが、先に私の意見をお話しし、事務局からの説明の後、桧森委員にまとめてもらうという段取りとしたい。
- ・文化は経済的裏付けがないと成熟しない。文化の問題を取り上げる際には、小田原のまちを豊かにするためにどうするかという視点を持たなければならない。富士フィルムや日立のような工場のこれ以上の誘致は難しいので、いかに人口を増やし、観光客を連れてくるかという視点が必要。人が減少しているところに豊かな文化を育てるのは難しい。また、観光客集めのキーワードとなるのは、城下町・宿場町の歴史ではないだろうか。
- ・他にはない小田原の有利な特長として、東京・横浜という大きな人口のバックグラウンドと、新幹線で東京から36分という交通条件があり、関東平野の中では最も有利な城下町と言える。自然に恵まれた箱根の玄関口として、小田原駅を活用していくという発想も必要。
- ・教育を切り口としてはどうか。答えのある問題しか解いたことのない人は、現実の問題を解決できない。今の日本の社会に求められているのは、壁にぶつかったときに突破できる力のある人。自然の中で生き抜く力を身に付ける一方で、最先端の知識を得る必要があるが、小田原は東京に近いので知識や経験を持つ人を呼びやすい。諸条件をトータルで備えた教育環境があれば小田原に住んでみようと思う人が出てくる。そこに文化が加われば、力強い振興策になると考えている。
- ・今後の進め方について、古矢担当課長からお話したい。

【古矢担当課長】

- ・小田原市では、これから文化振興ビジョンを策定して、文化を振興していくという

強い意思を持っているわけだが、そもそもなぜ文化を振興しなければならないのかという点については、文化の振興が課題の解決につながっていくのではないかと考えている。

- ・文化は良いものということは明白だが、厳しい経済事情の中で文化の優先順位は下がっており、以前に小田原市で実施していた満足度重要度調査でも、平成19年度の文化の重要度は32項目中最下位だった。市として文化の必要性をあまり語ってこなかったことも原因と感じている。
- ・お集まりいただいた委員の中には、文化がまちの力になっていくということをすでに実践されている方もおり、また、小田原の魅力の活かし方について示唆に富んだ発言もいただけた。これらを文化振興ビジョンにまとめていきながら、将来の小田原市のあり方、どのような市民がまちづくりをしていくのかを考えながら、市民が共通できるイメージをつくっていきたい。
- ・本日は委員の皆さんから意見を伺う形となったが、これから議論を積み重ねていくことができればと思う。

【石塚委員長】

- ・最後に桧森委員より問題提起の点で総括していただきたい。

【桧森委員】

- ・ビジョン策定の方向性は、本日の議論で大部分が明らかになったのではないかと。
- ・浜松市の文化振興ビジョンは、浜松が産業都市かつ農業都市であり、文化自体はそれほど豊かではないというところからスタートした。これに対し、小田原には歴史に育まれた生活文化があり、それが人々の中に色濃く残っている。生活に根付いた心の豊かさやゆとりは文化資産と言えるものあり、小田原の特長として残していきたい。
- ・なりわい文化という言葉が出てきたが、モデルとしては、杉崎委員のおっしゃった京都かと思う。京都の特長は、伝統と革新。伝統を背景にしながらも、新しいサービス・技術・表現を生み出しており、それが経済にも影響を与えていくことになる。
- ・文化振興ビジョンができると、その実現のために施策や事業が実施され、予算がつくという形になり、文化施策が納税者にとって納得いくものとなる。
- ・最終的には、ビジョンの実現度を何によって測定していくかということまで到達しなくてはならない。石塚委員長の挙げられた人口や観光客は分かりやすい指標。お洒落で楽しいまちであれば、人は集まってくる。
- ・今日の議論で出てきた中から課題を整理し、その解決に向けてのビジョンということにしていけば構成はできると思う。

【石塚委員長】

- ・本日は皆さんが持つ問題意識を挙げていただき、桧森委員の総括により大まかな方

向性が出てきた。

- ・最後に、事務局からもお話しいただきたい。

【古矢担当課長】

- ・短い時間であったが、皆さんが小田原に対してある程度共通のイメージを持っていることが確認できた。

(今後のスケジュール及び会議の進め方について杉本文化政策係長より説明)

【石塚委員長】

- ・以上で終了として良いか。

【神馬委員】

- ・小田原の共通認識という部分で、「小田原はこういうもの」と型にはめるのは危険。
- ・小田原には仕事の都合で来る人、単身赴任の人、小田原に全くゆかりのない人などもおり、そういった人にも受け入れられる、小田原を幅広く捉えたものが良い。小田原の良いところを活かすと同時に、悪いところも知らせていく必要があるのではないか。

【桧森委員】

- ・ビジョンとは、「これからこういうまちにしていきたい」という、背景の異なる人々が共通認識として描いていくもの。

【平井委員】

- ・なりわい文化は、自然・歴史・経済活動・生活といった非常に幅広いもので、一つの案として提示させていただいた。歴史や風土は小田原固有のもので、それは新しく来た人にも何らかの形で意識されるものである。
- ・ビジョンに完璧を求めてはいけない。漠然とした表現で誰にでも受け入れられるものでは、ぼやけてしまう。開かれた場であることを示し、不完全でも具体的な言葉にして投げかけることで、市民によりブラッシュアップされていくのではないか。

【石塚委員長】

- ・ビジョンとは、「こういう小田原市をつくりたい」ということと一体でなくてはならないと感じる。各分野にわたる政策ビジョンがある中で、文化に関する部分を本委員会で整理するものと認識している。
- ・さらに議論をしていきたいが、第1回会議はこれで終了とする。